

アメリカ日記 (上)

丸 田 明 生

1. 出発とニューヨーク

JALジェット機は1977年6月28日午前7時、意外に短い路面滑走の後羽田空港を離陸しアラスカのアンカレッジに向かった。空には雲一つなくやがて始まる日本の暑い夏を象徴するようだった。まもなく高度はぐんぐんのぼり、下はただ一面の雲海と、時々その切れ間からはるか奥底に小さな波のうねる海原が見えた。左隣りには愛知淑徳大学の安藤教授が70才という高齢にもかかわらず二度目のアメリカでの勉強に挑もうとしておられる。右隣りは日本地方銀行協会からの約3ヶ月のアメリカ派遣に参加した福岡相互銀行の未兼という若い行員が坐り、アメリカの大学やホームステイなど、いろいろの未知の世界に夢をふくらませている姿があった。日本地方銀行協会は毎年40及先50名程度このようにアメリカでの研修員を送っているとのことだった。

やがて約7時間の飛行の後、下界に縞模様のみえるアラスカの雪渓が次第に大きく迫りくるのを眺めるうちに、現地時間の午後9時(日本時間午後2時)アンカレッジ空港に着く。午後9時とはいえ北国の夏の例にもれずまだなかなか日は暮れそうにない。空港のあちらこちらにいろいろの国籍の飛行機が翼を休めている。女性の、いかにもソ連の中年

女性を思わせるようなImmigration Officerによって入国手続が行われる。ここで否応なしに初めて誰でも英語を話さなければならない。入国の目的、期間、滞在場所など—このような事項はあらかじめ英文として頭の中にまとめておいた方がよいだろう。そしてビザに書き込まれた文章はすぐその場で確認した方がいい。もし自分の意図と異った場合その国に一步を踏み入れてからでは大変面倒だからである。

さて、一時間あまりのstopoverの後飛行機はカナダを斜めに縦断してニューヨークのケネディ国際空港へと一直線に飛んだ。この時間帯はいわゆるtwilightで、西に沈みかいていた太陽がしばらくして東に姿を現わす。暗黒の夜というものはなく、眼下にはカナダ領内に点在する湖の面が光るのがみえた。そのうちに「あと一時間半でニューヨークに到着の予定です」というアナウンスが報ぜられると、誰の目にも又体の動きにも期待と不安が交錯するのが認められる。やがてニューヨークの上空にさしかかると、ハドソン川とイースト川によって浮かびあがるマンハッタンの林立するビルが右下方に、丁度絵葉書そのままに現われてくると同時に、高度はぐんぐん下り、Long Islandの住宅がマッチ箱のように見え、間もなく機は広大なこの空港の滑走路に吸い込まれていた。時に現地時間6月28日午前8時45分。日本時間午後9時45分。東京・ニューヨーク間は約15時間を要したことになる。

私は7月の終りまでは国際教育交換協議会が主催しているMichigan State Universityの大学教員のための講座に出席することにしていたので、空港にはニューヨーク本部のMarge Mayerという婦人が出迎えにきてくれていた。Marge Mayer嬢—といっても40才をすぎたbig womanだが—が突然流暢な日本語で話しかけてきたのには驚いた。しかしそれもその筈彼女は鹿児島に20年以上も住んでいたことがあるとのことだった。空港からはバスで約1時間、East Riverの下の地下道をくぐってマンハッタンのLexington Hotelに向かうことになった。

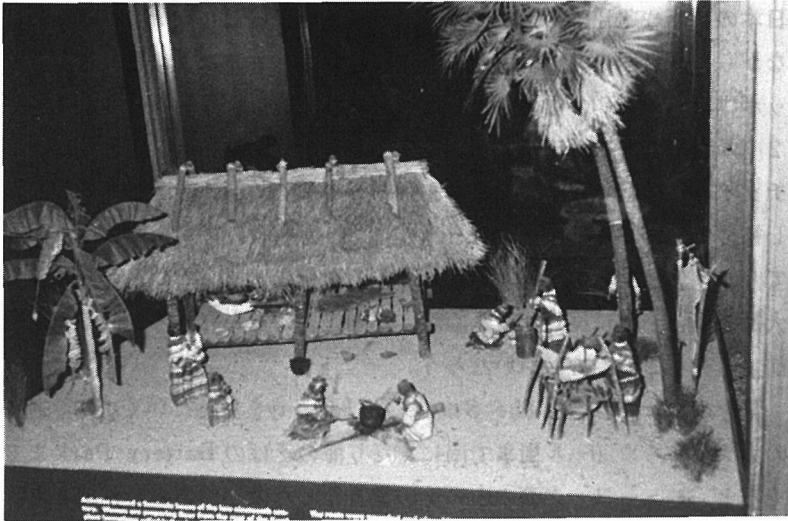
ホテルに着き、赤い服と帽子のベルボーイに部屋に案内され、昼食をすますと、短いニューヨークの滞在を有効に過そうと、もうとつくに日

本時間では夜中を過ぎているのに、興奮しているのでしょうか、又日中のせいであろうか、眠気も起らず、早速J. D. Salingerの*The Catcher in the Rye*の舞台になっているCentral Parkに出かける。この作品の主人公、高等学校生のHolden Caulfieldが虚偽と欺瞞に満ちていると感じ始めているこの現実世界から少しでも逃れんとして一人さまよう公園である。この公園で先ず驚いたことはその広大さである。南北に長く広がるこの公園は、その中を自動車道がいくつも走ってはいるが、人影は想像していたよりもはるかに少なく、巨大な岩石が所々に突出しており、その広さのためか手入れはあまり行届かないこともあって東京の公園などに較べてある索莫とした印象をうける。点在する建物には*The Catcher in the Rye*の記述にもある如く落書きがあり、それが又一際寂寥感^{ひとさわ}をそそる。若い黒人達がたむろし、何やら小声で話しあっている。ほかに人影がまばらなためか、その近くを通るのも何気なくはばかられる。しかしともかく私の第一の目的はHoldenが冬にはどこへ行くのか心配したCentral Park Southの池のアヒルである。この公園にはいくつかの池があるが、そのほとんどが一寸した湖といえる大きさである。私はそのなかにアヒルがいるものと信じて、足を棒にしてさがしまわった。広い公園なのでそれは大変な仕事だった。しかし夏のこの季節にもかかわらず遂にただの一羽も見出し得なかったのである。*The Catcher in the Rye*の初版が出たのが1951年だから、それから約25年、この時の経過がアヒルをこの大都会から追い払ったのであろうか。今更のように四半世紀の重大さをかみしめたのであった。しかしこのセントラル・パークの森の中に佇んで南の方を眺めると、摩天楼を背景に静まりかえった湖と、それに美しい影をおとしている大木の緑の設定は、これがニューヨークの真只中だとはとても信じられない気もしてくるのも事実だった。

*The Catcher in the Rye*に関するもう一つの目的地は、Holdenが最も気に入っている自然歴史博物館(The Museum of Natural History)をたずねてみることだった。この博物館はCentral Parkの北のはずれにあった。しかしこれを探し出すのには一苦勞したものだ。というのは私

が手にしていた日本製のニューヨークの地図の不正確さのためである。私は地図にもこんなでたらめなものがあるのかと認識を新たにしたものだ。こんな地図をつくっている出版社には猛省をうながしたい。ともかく暑さと不案内と、このいいかげんな地図のために貴重な時間を浪費しながら、ようやく何人かの人にたずねて目ざす博物館に着くことになった。さすがに大きい建物で正面左右に二頭の獅子の坐像があり、The Stars and Stripesが高くひるがえっている。このアメリカ国旗は、ニューヨークの通りを歩いてもいつも目にはいる代物で、官公庁関係の建物だけに殆んど限られている日本の場合とは大いに異なる。あまり奇異な感じを受けないのも一つにはそのデザインのせいかも知れないし、又一つには日本程戦争とのいやな結びつきがないのかも知れない。

博物館の中はかなりの人だ。みんな熱心に陳列品に見入っている。AD 550年産という巨木の輪切りにされたものがある。国の大きさを痛感させられる。そしてSalingerのいう如く、ここはアメリカインディアン関係のものが多い。等身大のいろいろな姿のインディアン。戦うインディアン、狩をするインディアン、布を織るインディアンの女、又ミニアチャーのインディアンの生活情景など。しかし何ととっても圧巻は実物大のカヌーに乗った数人のインディアン達である。櫂を漕ぐ者、弓を持つ物、遠くに目をやって敵状をさぐるうとするしぐさの者など、往時のインディアンの勇ましい戦いへの出発を再現している部屋である。サリンジャーが、めまぐるしく変りゆくこの世にあって、この博物館のインディアンだけは何時も変らぬ、と深い深い愛着をこめて作品の中で述べていたのが思い出される。そういえば、Central Park Southの池のアヒルはいなくなっていたが、このインディアン達はサリンジャーがみた30年前ともちっとも変っていない。サリンジャーはその後東洋の思想、特に「禅」に興味をもち、いくつかの作品を発表したが最近殆んど沈黙している。その沈黙に対して幾人かのアメリカ人から不満を聞かされたがそれも「禅」の姿かも知れないにしても、その境地を作品にしてみたいものだと思いつつこの博物館を後にした。



写真(1) ニューヨークの自然歴史博物館：インディアンの生活

ニューヨークは先にも一寸触れたように、又一般にいわれているように東京などに比べると汚らしい感はまぬがれない。林立するビルも、いわゆる近代化という面では日本よりも早いためか比較的古いものも多く、外観は日本の高層ビルよりも古めかしい。しかし東京などと違って、高層ビルが隙間なく立ちならんでいることで圧倒され、人間はその谷間を小人の如く流れている感を抱かせる。それが不思議にエキサイティングなのだ。その興奮を更に増幅するのが東京なみの混雑であり、それとは比べものにならない多人種からなる群衆であり、昼なお明滅するブロードウェイのあやしいネオンの輝きである。何故人はこのような大都会を歩む時興奮をおぼえるのであろうか。あたりは見知らぬ他人ばかりだからだろうか。

そここゝに Japanese Restaurant の看板が目に入る。大抵は日本人が経営している店である。中に入ってみると客は半数位が日本人である。

刺身、てんぷら、その他日本料理は大抵そろっている。それらの店には日本の新聞や週刊紙が置いてあり、それらをほっとした気持で取りあげながらも、日本での出来事が何か遠い世界のそれのように思われる。「サッポロラーメン」の看板を出した店もあり、質もよく量は日本より多い。2ドル程度である。「元禄」というすし屋もあり、ラーメン屋と共にランチタイムには勤め人やOLのニューヨーク子で一杯の盛況である。しかし初めてアメリカの土を踏む日本人にとって洋食のメニューにはまいてしまう。注文しても何が運ばれてくるか殆んど見当がつかず、しかも大抵の場合予期に反しているのだ。外国料理にどんなものがあるか出発前に研究しておく方がいいだろう。

暇をみつけて有名なThe Statue of Libertyを見物に行く。48番通りのホテルからウォール街まで南にくぐり海のそばのBattery Parkまでくると、ニューヨーク湾の中にその堂々とした後姿があらわれてきた。この波止場から「自由の女神」島までは一時間毎に遊覧船が出ており、いわゆるお上りさん達で一杯だ。私もその一人として船に乗り込むと、船は島を半周して島の栈橋に着く。この像は写真などでみるよりもはるかにエネルギーあふれる感じで、とても女性像とは見えないような筋肉のたくましさをみせていた。高さ93.5米、台座には次のような文句が刻まれている。

Give me your tired, your poor, your huddled masses
yearning to breathe free, the wretched refuse of your
teeming shore. Send these, the homeless, tempest-tost
to me. I lift my lamp beside the golden door.

疲れ、貧しく、詰込まれ、

自由に吸吸したいと願っている大衆を私の手に、

人であふれている国のあわれな人達を私の手に。

私は金のとびら（即ちアメリカへの入口）のそばでたいまつを
かかげます。

1776年のアメリカ独立から100年、それを記念してフランスから贈られたこの像の内部にはエレベーターがあり頭部近くまでのぼることができるのだが、残念ながら昇ってみる時間がなかった。暮色が濃くなる頃バッテリー公園にもどると、もう人影もまばらだった。アイスクリーム屋が目にとまる。東洋系の若者が売っている。日本人か中国人か、それとも韓国人かはわからない。しかし彼が日本人だったら何か話しかけてみたい気がする。しかし彼はこちらに特別な注意を払うこともなく商売（又はアルバイト？）に忙しい。

マンハッタンの南端から地下鉄にのって北上する。噂には聞いていたがその汚なさといったら想像以上だった。車内のいたるところに落書きがあり、乗客もさして多くなく、誰もおしだまって沈痛な面持ちにみえる。やはり黒人が多く、話しかけるのも何だかこわい気持がする。思い切って話しかけてみたがぶっきらぼうな返事しかかえってこない。乗務員も殆んどが黒人のようにみえたし、彼等とても愛想の悪さは同じである。それに比べて市内を走るバスの運転手はやはり黒人が多いけれども乗客の質は地下鉄のそれより上等のように思えた。自然に東京と比較したくなるのだが、こういう面のサービスはまだ東京の方がいい。地下鉄もバスもはるかに清潔で、街路もきれいである。

交通機関についてもう少し書くことにしよう。周知の如くマイカーの発達と共に鉄道はかなり斜陽化していることは事実で、ワシントン・ボストン間を走る路線以外の長距離列車は殆んど一日に一本か二本しか走っていない。そのかわりにグレイハウンドという長距離バスがニューヨークからシカゴへ、ニューヨークからロスアンゼルスへ、というように網の目のように昼夜兼行で、食事時には一時間前後、レストハウスで停車しながら走っている。このバスは鉄道よりは時間も正確で、車内も質素ではあるが、概して清潔である。しかし予約券というものは殆んどないのでバスターミナルへ早くから出かけて列をつくって待っていなければならぬ。この点などはわが国鉄の方がいいように思えるのだが、グレイハウンドは荷物は責任をもって預ってくれ、紛失などに対してはち

ゃんと弁償規程が定められている点ではアメリカの方がいいといえるかも知れない。これだと車外にも安心して出られる。アメリカの鉄道については後日シカゴからロスアンゼルスまで乗ることになるので、その時に更に触れたいと思う。

2. エール大学と“Young Man Axelbrod”

ニューヨーク滞在中にぜひ出かけなければならないところにYale大学があった。これはSinclair Lewis の“Young Man Axelbrod and other stories”という筆者の注をつけた大学用テキストの作品の舞台であったからで、34番通りにあるPen Stationから列車で約1時間半、大学の所在地New Haven につく。この列車に乗っている時、1977年度ノーベル文学賞をうけたSoul Bellowの長篇Herzogの一節を思い出した。主人公のHerzogが幼い頃父母に連れられてこの列車にのった時の思い出の場面である。今は大学教授となっているHerzogの貧しくとも一家睦まじかった時代をなつかしむ描写だ。ちなみに主人公Herzogは二度も離婚し、今は一人ぼっちなのである。美しい文章なのでここに引用してみよう。

Anyway, a holiday should begin with a train ride, as it had when he was a kid in Montreal. The whole family took the street-car to the Grand Trunk Station with a basket (frail, splintering wood) of pears, overripe, a bargain bought by Jonah Herzog at the Rachel Street Market, the fruit spotty, ready for wasps, just about to decay, but marvellously fragrant. And in inside the train on the worn green bristle of the seats, Father Herzog sat peeling the fruit with his Russian pear-handled knife. He peeled and twirled and cut with European efficiency. Meanwhile, the locomotive cried and the iron-studded cars began to move. Sun and girders divided the soot geometrically. By the factory walls the grimy weeds grew. A smell of malt

came from the breweries.

The train crossed the St Lawrence. Moses pressed the pedal and through the stained funnel of the toilet he saw the river frothing. Then he stood at the window. The water shone and curved on great slabs of rock, spinning into form at the Lachine Rapids, where it sucked and rumbled. On the other shore was Caughnawaga, where the Indians lived in shacks raised on stilts. Then came the burnt summer fields. The windows were open. The echo of the train came back from the straw like a voice through a beard. The engine sowed cinders and soot over the fiery flowers and the hairy knobs of weed.

とに角、休日は汽車にのることで始まるべきだ。彼のモントリールの子供時代のように。(今にもこわれそうな、ささくれだった) 籠にうれ過ぎの梨を入れて家族みんなで市電にのってグラント・トランク・ステーションまで行った。その梨はおやじのジョナ・ハーゾグがラachel・マーケットで買ったもので、蜂のたかりそうな、腐る寸前の斑点のふったものだったが、匂いはすばらしかった。そして汽車にのると、すり切れた緑の座席に坐って、おやじさんはいつものロシア製の真珠の柄のついたナイフで皮をむいた。彼はヨーロッパ的器用さで皮をくるくる廻しながらむき、切り割ってくれた。その間に機関車は汽笛を鳴らし、鉄の鋸が打ちこまれた車輛が動き始めた。日射しのさし込む鉄骨の屋根が煙を幾何学図形のように切りわけた。工場のへいのそばにはすすけた雑草が生えていた。麦芽の匂いがビール工場からにおってきた。

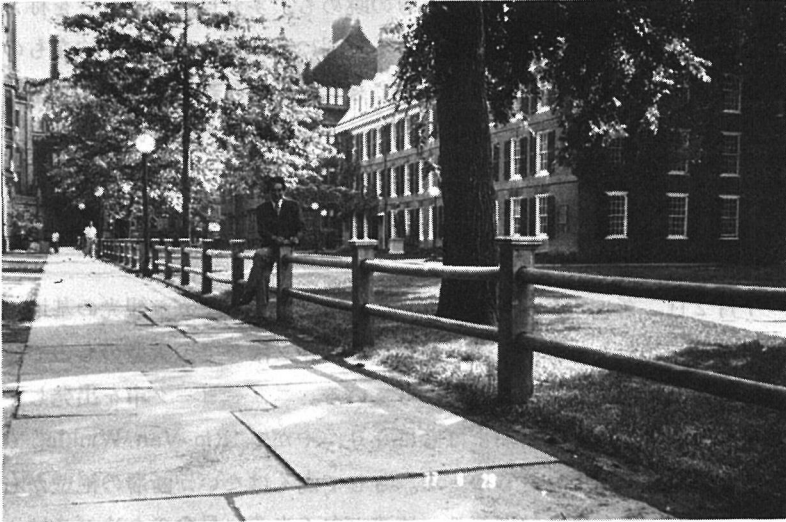
汽車はセントローレンス川を横切った。モーゼス・ハーゲグはペタルを踏んでトイレのよごれた漏斗形の穴から泡立っている川を見た。それから窓のそばに立った。水は光り、大きな平たくなった岩にあたって曲り、ラシーン・ラピッドでは渦を巻き、泡立っていた。そこでは水が吸い込まれ轟音をたてていた。対岸はコウナグアで、インディアンがやぐらの小屋に住んでいた。やがて色濃くなった夏の小麦畑が見えてきた。窓は開いていた。汽車のこだまはあごひげを通して出る声のように麦畑からはねかえてきた。機関車は燃え殻や煙を雑草の真赤な花や、ふわふわした実のうえにふりかけていた。 一筆者記

セントローレンス川はやゝ濁ってはいたが泡立ち流れていた。もはや

麦畑は多くみられず、沿線の平地は殆んど人家で埋めつくされていた。

New Haven の駅に下りてみると、駅前には商店もなく道が左右に走っているだけでタクシーも見当らない。すると間もなく60才位のあまり風采のあがらない白人が近寄ってきて、どこへ行くのか、と聞く。エル大学だ、と答えると2ドルで連れて行こう、という。あまり時間もないので彼の車に乗ることにした。上記のテキストの中にこの大学の fence があたかもシンボルいように書かれているので是非それがどんなものか見たいと思っていたので、それがあるところへ案内してくれ、と言うと彼はそれを知らないらしくフットボールのスタジアムへ連れて行きながら、あと3ドル出せ、という。彼が知らないのも当然だと思いついて大学のビルの方へ帰ってくれるようにいうとあと5ドルだという。仕方なくそれを払って主要な建物らしいところで下りた。そこに大学らしい人がやってきたので尋ねると、それは正面玄関を入ったすぐ側だと丁寧に教えてくれた。正面玄関には案内嬢がいてフェンスに案内してくれた。木製のその“fence”は作品を通して頭にえがいていたものよりも低かったが、さすが年輪を思わせるたゞずまいをみせ、今はあまり人影もない夕暮近くの陽をあびて心地よさそうに南北に伸びていた。作品の主人公Axelbrodになったつもりでそれに寄りかゝると、滑らかな感触が伝わってくる。正面に高くそびえる白い大理石の時計台が迫ってくるようにみえる。

やがてフェンスを後にしてキャンパス内を少し歩いてみることにした。しかしどの建物が何の建物かゆっくり調べてみる暇がない。そのうちにチャペルの前を通りかかると日本語らしきものが聞えてくる。そちらに顔をやると二人の若い学生が話をしている。まさしく日本語だ。声をかけてみる。二人の内一人は外務省から派遣された留学生で、今一人は小説家志望ということだった。彼等と一緒に学内のコーヒーショップでジュースを飲み、お互いの実り多いアメリカ滞在を願い合って別れを告げた。



写真(2) エール大学：「フェンス」と筆者

この大学町 New Haven の東と西にそれぞれ East Rock と West Rock という小高い丘があり、その中の East Rock は上述の小説の主人公が老人学生の孤独感を何とか慰さめようと登っていく所である。小生もそのあとをたどってみることにした。頂上までかなりの道のりで、林の中を土の感触に快い弾力を感じながら登っていく。この旧登山道と交錯しながらドライブウェイが通っていて車が時々追いついたり、下ってきたりする。歩く者はハンター三人の外は遂に誰にも合わなかった。頂上からはやや遠く眼下に石油コンビナートが海沿いにのび、右に眼をやると West Rock の赤味がかかった断層の丘がみえる。そういえば今自分の立っている East Rock も赤い粘土質と岩盤が幾重にも重なった山で、こういう地質はアメリカの東部ではよくみられる地質であるそう。そしてそれは日本よりも古い時代のものと聞いた。主人公 Axelbrod がその昔こゝから眺めた Long Island は今は見えない。Axelbrod が、この頂上で出合い、学内でただ一人彼の心を理解してくれた Gil Washburn が、

“Great view!”と叫んだこゝからの眺めも、多分自然の美しさを称えたものだったろう。今はもう眼に入る範囲にはあまりにも人工的なものが多い。たまたま自転車で登ってきた大学生の若者にこのことを話すと、Pollution (汚染) のせいだろう、と答えたのも時代の推移に思いを馳せると共に何故か頭に残る言葉だった。

3. ナイヤガラ瀑布

7月2日、グレイハウンドバスに乗り込んでナイヤガラ観光の基地バツファローにむかった。この長距離バスは半2階だての大型のもので荷物は車体の下部に預けることになっている。ニューヨーク市を出発してからしばらく行くと人家がまばらになり、やがて“Rip Van Winkle”で有名なキャスル山地にさしかゝる。さして高くはないが断層の絶壁が右に左に現われる。雑木林が茂り、清流が白く光る。昼食のためバスは一時間休止し、乗客は二三軒群がったレストランに吸い込まれていく。私が入った店も立派なもので沢山のメニューがあり、インテリアも豪華であった。しかし食べ物の名前はまだ覚えられずほとんど閉口する。客も多いのでゆっくりとメニューの内容をきくわけにもいかない。しかし何とか腹を満した後、外に出てゆっくりとあたりの山々を眺める。やがて1時間後に再び出発したバスは、夕方近くBuffaloに着く。New York州も相当の広さで、最南端にNew York Cityが位置し、その北に扇状にNew York Stateが広がっている。Buffaloはその扇形の北西の端にある。冬は寒く雪の多いところと聞いた。こゝではかの有名なHilton Hotelに泊った。さすがに超一流ともいふべきもので部屋も広く、シングルにダブルベッドが入れてあり、寝心地も申し分ない。ホテルのレストランもゴージャスで、内容も一流。勿論値段の方もかなり高い。夕食のために最低10ドル、見苦しくない恰好をしようと思えば20ドルは必要だろう。しかし雰囲気といい、サービスといい最高で、ワインに始まり、果物を経てデザートに終るコースは一度は味わってみたい代物である。夕食後いつまでも明るい街に散歩に出かけたが、人通りもまばらで、ニューヨ

ークとは対照的な印象だった。こゝは化学工業の都市で、ストライキなどもよく起るといって、こゝに住む一婦人は眉をしかめてみせた。

ナイヤガラ瀑布へはこゝからバスが出る。瀑布を中心にそこは公園化して近くからの家族連れや、遠くからの観光客でやはり賑わっている。観光地の混雑は日本もアメリカも同じだ。瀧の近くの手摺に寄りかかるとしぶきが飛んでくる。そして水が轟き落ち込むあたりに七色の虹が大きく半円を描いて美しい。小さなボートにのり厚いレインコートを着て瀧壺に接近する。この方がカメラアングルがよい。一寸パスポートを見せるだけでカナダ側へも行けるそうだが、私には時間もない。瀧は大小いくつもあり、こんな平坦部にこのようなスケールで存在するのは世界にも例をみないのではあるまいか。土産物店もごったがえしていた。そして夕方再びグレイハウンドに乗込み、ミシガン州立大学の所在地 East Lansingへと向かったのである。

4. Michigan State University

Michigan State University (以下MSUとする)にはInternational Centerというセクションがあり、こゝで外国からの留学生やvisiting teacherの世話を主として受持っている。アメリカの殆んどの大々な大学にはそれに類するものがある。このMSUのInternational Centerの我々外国人に対する世話は本当に行届いたものだった。先ず我々大学教員11名をデトロイトまで三台の乗用車で迎えにきてくれた。勿論このセンターのディレクターであるDr. Benson自身の運転を含めてである。そしてこのBenson氏のアシスタントというのがMrs. Kumataという日系の女性で、数年前に同じこのMSUの教授であった主人を亡くされたということだった。日本語と英語が全く自由な40才代である。デトロイトでの我々との初対面の会話も我々と寸分違わない日本語だったので、少しでも英語の練習をと思っていた者には戸惑いと失望があったかも知れない。しかし彼女の側には逆に日本語を使いたいという気持があったのかも知れない。けれどもこの女性のお嬢さんのCarolさんも一緒に来

てくれていたのだが、三世の彼女はもう日本語は話せなかった。アメリカにいる二世と三世というのは、大凡この親子のような言語的状況にあるのである。

さてデトロイトからは信号のないハイウェイを、車が二列三列となって殆んど起伏のない平野を突っ走る。それにまじってミシガン州を北上する。畑が大部分だが、所々に林があり池がある。広大さ、豊かさをつくづく感じながら、又Dr. Benson との会話を楽しみながら車に身を任せること2時間あまり、夕暮近く車は目的地East LansingのMSU大学院生寮に着く。夏の間帰省している院生のあとに我々が入ることになっているのである。私の部屋は4階でバスルームが二人共同だが、居間は個室で立派なもの。ソファベッドと机、それにスタンドが3個も置かれている。備品は入寮手続の時にチェックがなされ、出寮の時に破損したり紛失したりした場合は弁償することになっている。この辺はきちんとしたものだ。食事は並べられた料理皿から自分の好きなものを選んでレジで仕払うことになっている。ライスもあれば魚のフライもある。それにゼリーや果物も豊富だ。ただしライスは例の細長くサパサパしたもので、これはカウンターで注文するのだが、その時“Gravy?”と問われる。肉汁をかけるかどうか、という意味である。アメリカ人だと大抵“Yes”であり、日本人だと“No”である。このサパサパした米でも、米自体の味をかみしめたいのが日本人の小さい時から植えつけられた嗜好なのであろう。夕食も3ドル位で果物からパイ又はケーキまでジュース又はコーヒーを含めて舌鼓がうてる程である。それに又食堂の窓からの眺めがすばらしい。というのは真直ぐにのびた自然林が高い天井まで一杯の一枚ガラス越しにながめられるからである。たてて加えて、広い食堂内は肌の色、衣服の色が実にカラフルな絵模様そのものの人達で一杯だ。殆んど世界の外国から男性が女性がこゝにやってきている。発展途上国からの若者達は政府の資金で派遣され、やがて自国に帰ると重要な任務が約束されているエリートも多い。

こゝでアメリカの大学制度について一寸紹介しておかねばならない。

この寮のように夏のさ中に多くの院生がいるということは、夏の講座が開かれているということの意味する。即ち、大学院といわず学部といわず多くの大学では秋、冬、春、夏の四学期制をとっており、普通の学生は夏学期 (summer term) を休むが、単位を落した者とか、大学を3年間、又大学院などを正規の期間よりも早く終えたい者は夏学期も受講する。授業料は1単位幾らということになっている。夏学期は他の学期にくらべて開講科目は少ないが、それは受講生の人数などによって決められる。教授の方もこの場合自分の希望がある程度入れられるようだ。だから教授の中には特に夏学期に限り他の大学へ行って講義をするということもできる。私がミシガンで会いたいと思っていた大学時代の同級生で、その後アメリカに留学し、現在University of Michiganの associate professor になっている名柄君も丁度Vermontに出張講義に出かけていた。

それにこの夏学期には中学や高校の先生もやってくる。更に勉強して取得単位をふやせばよりいい地位につくこともできるようだ。私が顔を出した英文学の教室にもそんな人が何人かいた。又このクラスには日本からの女子留学生が2人いた。彼女等は学部を出て一旦中学校の教師生活を1、2年送った後思い切って職場を止め、こちらにやってきた人達である。こちらにくる時、休職願いで、2年間の修士課程を終えて帰った時に又続けさせて欲しいと頼むと、教育委員会は、そんなえらい先生はいらないから、と断られたそうである。彼女らは卒業して日本に帰ってからの新しい就職のことが心配のようであった。しかし2年間のこのでの勉学はかなりの自信となってかえってくるであろう。

さて授業風景であるが、文学の講義に関していえば一冊の本を1日ないし3日位で教授が講義する。学生はその重要な点などをノートに書き込んだりしながら時々質問をする。時間は学部では60分が普通で、大学院では90分程度である。同じ教師の同じ講義が毎日行われるから真面目に予習すればかなりの負担である。みんな思い思いの服装をし、背中まるだしの女性の姿もみられる。授業中にコココーラを飲んだりする者も

いるが講義は熱心に聞いているようだ。内職をしたり別の本を読んだりする者はいない。出席などはとっていなかったが、時々レポートを出し、勿論学期末には試験を受けなければならない。教える側の時間数はかなり余裕があるようだったし、バカンスを楽しむことも又心得ているようで、私の所属していたHoward教授もこれが終るとサンフランシスコに出かけるつもりだということだった。この教授とは私の書いた論文を読んでもらったり、それについて意見を交換したり、本を貰ったりした。又これからお互いに論文を交換しようということになった次第である。



写真(3) ミシガン州立大学：インターナショナル・センター

MSUでの生活について少し書いてみよう。7月3日寮でぐっすりと眠ったあくる日、即ち7月4日は独立記念日である。学校は勿論休日なのでMichigan Capitolに見学に出かける。かなり古いが堂々たる建物である。この州会議事堂は自由に見学できることになっており、真赤な背広をきたMSUのアルバイト学生が内部を案内してくれた。ミシガン州の歴史、地理、産物など美しく描かれた絵画や写真、サンプルなどが内

部をかざり、彼はきれいな英語でそれらを指さしながら説明してくれた。さすがに豊かな国なのだろうか内部の設備もすばらしい。各州にも上院と下院とあって会議室は勿論別々で各議員の席は決まっていて電話など一つ一つ置かれていた。そしてその夜はDr. Bensonの宅へ招かれ、初めてのアメリカの家庭料理にありついたのである。家庭料理はさすがに一味ちがっていた。心のこもったおいしさともいうべきものだろうか。この時には嘗て愛媛大学の教官で今MSUで言語学の教授になっておられる今村先生夫妻も同席され、私も面識があったので大変なつかしく、又はるばるこの地で活躍されている先生に敬意をおぼえた次第である。このパーティは美しい芝生のバックヤードと、地下のリラックシングルームの2ヶ所で行われたが、殆んどすべての家庭に地上と同じ面積もの地下室のある構造は、面積のせまい日本にも是非とり入れたいものだと思う。

MSUに滞在中や、長期間の家庭滞在をのぞいて二人の方の家庭への招待を受けた。一人は大学からの紹介によるMr. Brittinという弁護士の家である。招待をうけた日は日曜日で、車で寮に迎えにきてくれ、教会に同行してみた。教会には予期以上の人が出席しており、若い者も多かった。若い牧師がバイブルを読み、歯切れのよい声で説教をした。ここでBrittin夫妻は多くの人に紹介をするのだが、今ではとても全部の人の顔は思い浮かばない。しかしその中には娘と二人で今度二度目の日本旅行に出かけようとしていたcommunity college—アメリカの短期大学で主に職業教育に中心にしている一の女性教師もいた。彼女もきちんとした英語を話してくれる一人だったが、そんな人と話するのは本当にたのしい。Brittin夫妻は大学構内のクラブハウスでシャンペン付昼食を御馳走してくれた後、このEast Lansingのあちこちを案内してくれた。この大学町はそんなに名所旧跡というものはなく、いわゆる高級住宅地と、比較的貧しい人々の住いのある地帯へ連れていってくれたが、後者の家というのは主としてアパート形式になったところで、やはり黒人およびプエルトリコ人などのものが多く、彼等の家は教会が募金などで建

てたものだという事だった。しかしそのような家でも内部はわからないが外部のデザインはかなり留意したものだった。夕食を更に彼等の大きな家で御馳走になり、こちらが持参したスライドをみせると大変興味を示し、色々の質問がでる。こういう場合、自国のことを正しく、しかも愛国的に説明しようという気持になるものだ。Brittin氏は又日本の切手を子供の頃から集めていて、明治初年からのそれが見事に整理されており、まさにそれは途方もなく価値あるものと思われた。

MSUに関してもう一人是非言及しておかなければならない人物に Humanities 学部のプラット氏がいる。この人はレセプションの折に初めて紹介を受け、最初からどことなく気が合った人物である。ヒューマニティというの人間学部とでもいおうか、哲学、歴史、文学など広い分野の学問を身につけるところで、この準教授は南部の出身ということだったが、北部人とは一寸違った人なつつこさというか、暖かさというか、そんな雰囲気のある人だった。彼の研究室を初めてたずねていった時も顔をよく覚えていてくれて、書類に埋もれた小さな部屋で、心のこもった歓迎をしてくれた。私が南部のミシシッピー大学のFaulkner Conference に出席する旨を話すと、更に親しみをこめて南部の彼の故郷のことなどを話しながら、Faulknerの作品の中に書かれていること自体、まぎれもない南部の姿だと強調するのだった。彼は又別の日に自宅にも招いてくれ、ローソクのみをつけたベランダのテーブルで赤ブドウ酒に始まるブフテキのコースの中で更に話の花を咲かせるのだった。プラット夫人の手づくりの料理も又すばらしかった。アメリカの料理がまづいというのは間違いで、やはり暖い雰囲気の中の心のこもった料理の味はいつまでも忘れられない。この奥さんもMSUの部長付秘書とかで、身分は旦那より上だということだった。しかし二人は極めて仲がよく、旦那が尻に敷かれているようには見えなかった。地位は彼女の方が上でも給料は自分の方が上だとプラット氏は笑った。プラット準教授とは更に二回昼食を共にしたが、その内一度は日本の障子が窓一面にはめこまれたデパートのレストランであり、今一度は赤いランプのみがほの暗く幾

條にも列をなしたあやしいムードの中華料理店であった。そしてこのアメリカで私は初めて本格的な中華料理にありついたのである。

さてこゝでMSUのキャンパスについて述べてみよう。7月3日、MSUに初めて足を踏み入れ入寮手をすませた後、その美しさに魅せられて散歩に出かけた。なかなか暮れない夕空の下に、ミシガンの州木であるCrab Apple (野性リンゴ)の木があちこちにこんもりと茂り、夕日に映えてその赤い小さな実がきらりと光る。アメリカ松があるかと思えばオークの大木や、白樺の並木もあり、処々にアジア産の樹木も大きく育っている。校舎は配置をよく考えて建てられ、そのまわりを美しく刈りこまれた芝生が取囲み、その上でfrisbeeを投げあっている学生もみえる。キャンパス内に幅10米の川が流れ、あひるが泳いでいる。若い男女や家族連れの人達が兩岸で憩い、又ボートを漕いでいる。キャンパスの広さといったら一。東の端から西の端まで歩けば1時間近くもかかるだろう。私の寮は東端にあったが、西の端にあるフットボールのスタジアムや、プール、テニスコートまで歩くにはずい分と時間がかった。時節柄プールには二、三度泳ぎに出かけたが、オリンピック競技場並みの飛び込み台まであって、ダイビングを楽しむ人の姿がある。プールサイドの人達は思い思いに振舞っている。その中に本を読んでいる者の多いのには驚いた。又このプールには誰にでも開放されているようだった。1977年のミシガンの夏は例年より暑く日本の夏とあまり変わらないようだった。これが本当のミシガンの夏ではないんですよ、それがミシガンの人の口癖だった。けれども八月に入るといつものミシガンの夏がやってきたのだが――。

アメリカの東部の大学のなかには創設の目的が牧師の養成にあるものが多いが、MSUはそういった大学ではないけれどもキャンパス内に苔むした礼拝堂があり、鐘の音が定まった時間に鳴りひびく。又野外劇場があって夕方には市民も含めて多くの見物人がやってくる。劇場の性格上喜劇を上演することが多いようだが、私もシェクスピアの「お気に召

すまゝ」を鑑賞した。学生の演劇部がやっているのだが仲々うまい。みんな惜しみなく拍手する。又夜には講堂にあたるところで映画が毎土曜日に上映される。これは主として記録映画で私がみたのはスイスを紹介する映画だった。こういう催物には何か社交の場としてやってくるような印象もうけた。

MSUの学生数は約4万人であると聞いた。そのうちの半数は卒業しないまま去っていくそうだ。この大学の総長が黒人であるというのも意外なことだった。大学の空気は自由であり、この「自由」という言葉、即ち“liberty”は又アメリカ生活の中で特に基礎となっているという感じをもった。大学の地域社会へのサービスも行きとゞいており、州立なのでミシガン出身者の授業料はそれ以外の州の出身者のその半額だということだ。12才の学生が入学してくるという話も聞いた。アメリカは画一的に物事を考えないのである。

7月末日をもってMSUの夏学期の講義も終り、大学からは時計台をスケッチした絵をいたゞいた。そしてこゝでの滞在の終りにMrs. Kumataの自宅で手づくりの日本料理を御馳走になった。その家というのもディレクターのDr. Bensonの家に優るとも劣らぬ立派なもので、遠い昔我々の祖先が嘗めた辛酸をしるばせるものは全くなかった。私はそういう意味でアメリカ各所で築いた日本人のすぐれた業績に賛辞を呈すると共に同一民族としての誇りも抱いたのであった。

(つゞく)